

第12回 (H30. 12)

剛腕と傲慢

戦国大名毛利の家臣で安国寺恵瓊えけいというお坊さんがいました。京都を拠点に朝廷や各大名との折衝にあたり、全国的情勢を地元で報告していました。彼が送った報告書の中に、日の出の勢いの織田信長について、「三年五年は持つだろうが、いずれ派手にひっくりかえる」と、劇的な形で失脚すると予測していました。その十年後本能寺の変が起り、彼の予測は見事に的中しました。

数日前、日産のカルロス・ゴーンが逮捕されました。日産を再建したその剛腕ごうわんぶりは、恐れられまた尊敬もされてきました。彼の結末を予測した現代の恵瓊がいたかどうかはさておき、ゴーンの転落は大きな衝撃を与えつつあります。瀕死の会社を再生するなど、

大きな変革を成し遂げる場合、多くの軋轢あつれきや犠牲者を生みまます。指導者は目的達成のため、非情の決断を連発せねばなりません。その非情さに耐えられる人が剛腕ごうわん、辣腕らつわんと評され、変革者として名を残すことになるのだと思います。

しかし、その人たちの非情の決断の裏側には、切り捨てざるを得なかった人々への想いなど、忸怩ちゆうじたる想いが潜んでいるはずです。けれども、その想いは変革成功への賞賛の嵐の中で、いつの間にか希薄になっていくのです。謙虚さを失った剛腕は傲慢に外なりません。ゴーンとゴーマン、一字違いですが……。